

花軍

前

ワキ 都の者

ツレ二人 同行者

シテ 伏見の里人（実は女郎花の精）

後

ツレ数人 草花の精

牡丹 牡丹の精

シテ 菊の精

地は 山城伏見

季は 秋九月

ワキ詞 「是は都方に住居する者にて候。さても洛陽に於て遊樂の瓊筵つきせぬ中に。殊にもてあそび候ふは

花の会にて候。今日は伏見の深草に分け入り。草花を尋ねばやと思ひ候。

サシ 「面白や實に一年の詠めにも。皆草木の花に知る。

三人 「名残を思ふ心の末。山路幾野に行きかふ色の。こや九重の情なる。

下歌 「立ち居る雲も遠近の。はや秋深き夕時雨。

上歌 「濡れつゝも。鶴なくなる深草や。く。誰を忍ぶの浅茅原。げに住み捨てし故郷の。野となりても露しげき。草のはつかに暮れ残る。伏見の沢田水白く。薄霧迷ふ夕べかな。

ワキ詞 「急ぎ候ふほどに。伏見の里に着きて候。やがて草花を尋ねばやと存じ候。

シテ詞 「なふくあれなる人々。見奉れば都人と見えさせ

給ふが。草花をめされ候ふは。いかさま此ほども
てあそび給ふ。下草を尋ね給ふやらん。

ワキ詞
「実によく御覧せられて候。さやうの為めに人を誘
ひ。唯今こゝに來りたり。処の人にてましまさば。
花のあるべき処をも委しく教へてたび給へ。

シテ
「先づ此伏見の菊の花は。翁草とて名草なり。其外

おほき草花なれば。此方へ入らせ給へとて。
シテ
「人の心も花染の。

ワキ
「日もくれなるの。

シテ
「うつろふ姿も色ふかき。

ワキ
「山陰に。

地
「それぞとばかり心あてに。折らばや折らん初霜の。

置きまどはせる白菊の。花も色そふ夕暮に。猶露
しげき野分かな。く。

シテ詞
「いかに申し候。此花どもを召され候はゞ。先づ女
郎花を手折り給へ。

「是は不思議の仰せかな。処の名草白菊をこそ。先々折るべきことわりなれ。女郎花を手折れとは思ひもよらぬ御事なり。

シテ
「よし／＼承引し給はずは。女郎花に值遇の花をかたらひ。夢中にまみえ花軍を。はじめて白菊うち散らし。恨みのほどを晴らさんと。

地
「くねる姿は女郎花。かりにあらはれ來りたり。今宵の月に待ち給へと。夕暮の花の陰に。立ちより

て失せにけり。立ちよると見えて失せにけり。(中入)
ツレ同一声
「思ひ出づる身は深草の秋の露。ちるともよしや吉野山。

牡丹
「さても草花の大将に。牡丹は情もふかみ草。淺からざりし花の名の。真先かけて咲き乱れ。

地
「さて其外の草花の精。／＼。四季をり／＼の時を得て。数をつくせる花の顔。亂れあひたる花軍。風にたゞよふ有様かな。其時芭の内よりも。姿も

かゝやく天つ星。照りかゝやける光の内に。白髪の老人顕はれたり。

後ジテ
「そもそも是は。伏見の翁草とて。幾年経たる白菊なり。

地
「実にも心は若草の。位を争ふ花軍。ことわりなれども翁にゆるし。たがひの軍をやめつべしと。夕日も輝く久方の。雲間の星の光を添へて。菊の盆とりぐなり。

地
「花の和睦をなし給ひ。く。勇み悦ぶ草花の心。千代のためには山人の。折る袖匂ふ菊の露。花鳥の戯むれ。翁は弱々と立ちあがり。伏見の竹の直なる御代に。千草の花を押し分けて朝の。露より此夜は明けにけり。